アントナン・アルトー
「ジャン＝ルイ・バローへの手紙」（全５編）[1)]

Lettres d'Antonin Artaud à Jean-Louis Barrault (1935–36)

パリ、1935 年 6 月 14 日

親愛なるバローへ

私がどれほどの敬意を抱いているか、君ならわかってくれるだろう。君の仕事にも、そして君自身にも。私がどういう気持ちで手紙を書いているか、君ならきっとわかってくれることだろう。――

また、たとえわずかなことであっても、私が言おうとしていることを気にかけてくれたり、そこに思考の苦しみが影を落としていたとしても、君自身のなかで気にとめておいてくれることも、ありがたいと思っている。――

私たちに共同作業が可能だとは思えない。というのも、私たちをつないでいるものを知ってしまえば、私たちを別々にするものについても、よりわかってしまうのだし、つまるところ「作業方法」については、一見すると同じであるように見えていても、まったく対照的なふたつの立場から出発すれば、別々の結論にたどりついてしまうからだ。『チェンチ一族』に出演している俳優たちの稽古を君に頼んだとき、その様子を見る機会があったが、ある意味で、君の俳優たちをの扱い方は手荒なものだった。自分自身に信頼がありすぎるために、やはり最後には役目の枠をはみだしてしまっていたのだ。

最終的に君は何度か私に面と向かって、個人的な作業方法に疑問を呈してきたけれども、何よりもまず作者として、現場から離れることはあまりできなかったし、作品づくりのなかでぶつかったいくつもの壁を越えるためには、苦労と工夫が必要だったのだ。ただし、私が一切を遮ってまで固執するのは、演劇のすぐれて物質的な部分であって、この壁はなかなか壊れてくれない。これは、ぼくが四年以上も前からずっと書きつづけてきたことから導き出されたことなのだ。

私は、作品が自分自身の手によって上演されたと主張したくはない。たとえ、そこに鶴の一声があったとしてもだ。仮に『チェンチ一族』において、すべてがそのようにして調整されていたとしても、それが意味するのは、『チェンチ一族』はある部分においてのみ、私の作りたい演劇の枠組みが反映されていたということであり、結局のところ、やらなければならない仕事があまりに多すぎて、私が忙殺されてしまっていたということにすぎない。――

結局のところ、とくにシュルレアリスムが生まれてからは、もはや人間の純粋さなど信じていないので、何か革新的なことができるとは思わなくなってしまった。だからこそ、私が君のことを高く評価すれば、君のことを思い誤らせてしまうかもしれず、そのような危険性はできればもう避けておきたいのだ。

私は、たとえどのような仕事をしていても、自分の近くにいる人間に耐えることができなかったが、それは『チェンチ一族』のあと、ますますひどくなっている。もし、自分の舞台のうえで動物を歩かせることになったらとしたら、私なりのリズムとやり方でやらせてもらうことになるだろう。そして、動物にそうしたやり方をわからせるために、いろいろな訓練を見つけてみせるだろう。さもなければ、私が凡庸な理論化にすぎないということが証明されてしまうだろう。しかし、私はそのように考えてはいない。

繰り返すようだが、君が作品をつくろうとするなら、いまの君の段階で、君自身の理解の仕方でつくるべきだ。私のほうはと言えば、少しばかりのあいだ安静にして、私を麻痺させている害悪を追い払う努力をしてみようと思っている。おそらくは、数ヶ月はかかるだろう。そのあいだに、コンティ〔アルトーの友人であるジャン＝マリー・コンティのこと〕と会ってほしい。彼なら、君に必要な金を少しばかりなら見つけることができるはずだし、君が抱えている問題もうまく処理してくれるだろう。彼に会いにいったときに、私はそういうふうに話をしてきた。

彼は、君について書いた記事〔『母をめぐりて』に関する劇評[2)]〕を『新フランス評論』の７月１日号に掲載すると、強く約束をしてくれている。君のことを褒めすぎだとは、誰も思っていない。

君に心を込めて。

アントナン・アルトー

1）［訳註］底本には、以下を用いた。Antonin Artaud, *Artaud à Barrault*, Paris: Bordas, 1952, pp. 89–97, 103–111. ただしテクストの異同に関しては、Antonin Artaud, *Œuvres complètes*, tomeIII（Paris: Gallimard, 1978）における註も適宜参照した。

2）［訳註］アントナン・アルトー『演劇とその分身』、安堂信也訳、白水社、1996 年、pp. 236–240.

パリ
1935年7月22日

親愛なるバローへ

もし、いわゆる「天の恵み」というような、美しい自然が好きだというなら、君に紹介すべき美しい自然があるかもしれない[3]。

その女性は、絵画やポスターを描いていて、14才からダンスをしていて、言葉や言語の感覚の良さのようなものをもって文章を書くといったように、とにかくいろんなものを愛しているのだが、かつては光り輝く美しさの持ち主だったのに、どういうわけか18才のときに太ってしまったのだ。――きっと、何かあったのだろう。何もなかったわけではないのだろう。とにかく、君は会うべきだし、せっかく劇団をつくったのだから、試してみてもよいはずだ。彼女の才能は、誰が周りにいてその迸るエネルギーを落ち着かせてやれるかで変わってくる。

心を込めて。

アントナン・アルトー
ヴィクトール・コンシデラン通り12番地、パリ

追伸――これは演劇の話である。女優ができそうだからと、君に彼女を紹介しているのだ。

親愛なるバローへ[4]

知らせがひとつある。昨日、新フランス評論社にて、マルローから、ひとつの悲劇作品を手渡されたのだが、これはバスク人による本物の悲劇であるように思える。アイスキュロスの『テーベに向かう七将』という作品で、精神分析された下水掃除人たちの話〔ロラン・ピュナルの作品『ハリカルナッソスのクレオン』〕を通じて語られるセネカが、これを伝えている。

魔術的なものによって再構成されたひとつの〈神話〉のようなものと、とても奇妙な錬金術から生まれる言語とが存在している。

そこには音がある。

そこには行動がある

詩が

本物の悲劇の隠れている内容が。

そこに現代的な〈神話〉は存在せず、縮こまっている。にもかかわらず、荘厳なのである。

人間の登場人物を追究することは、ひとまず措いてみてほしい。〈人間〉とは、私たちを最もうんざりさせるものなのだから。そして、隠れた神々から抜け出してみてほしい。敵対する力と言ってみてもよいが、わたしたちが捉えようとすると、形になるような力から。

君の友人、

アントナン・アルトー

追伸――それと、私が執筆した悲劇作品『タンタロスの責苦』を、君に読んで聞かせなければならない。

ハヴァナ
1936年6月17日

親愛なるバローへ

ちがう。相も変わらず何かを君に頼んでしまったことを後悔しているのは、むしろ私のほうなのだ。とはいえ、これは些末なことなので、呑み込んでほしい。

この4か月のあいだ、私は驚くほど金銭がなくて苦しんでいる。雑誌や新聞に記事を寄せたりしているのも、自分の身を立てるためなのだ。この1か月は、政府発行の新聞紙である「エル・ナシオナル・レヴォルシオナリオ」の定期的な協力者となっている。

しかし、これらの記事が私の独特な見解を訴えるのに役立たなかったら、すべてが意味のないものになるだろ

3)［訳註］この手紙で言及されている女性は、ソニア・モッセ（1917-1943）のことだと推定される。モッセは、1937年のシュルレアリスム国際展に女性でただひとり出品をした造形美術家。
4)［訳註］この手紙には日付が記されていないが、アルトーが『タンタロスの責苦』の朗読会を行ったのは、メキシコに発つ直前の1935年11月のことであることから鑑みて、この手紙がバローに送られたのは、1935年後半のことであるだろう。

う。なぜなら、自身の考え方を「広める」ために、私はここにやってきたのだから。メキシコ旅行の目的をきちんと理解している人々はほとんどいない。重要なのは、生に変化をもたらすことであり、もはや生きる場所を見つけられないフランスから逃げ出すことだったのだ。

詳細については割愛させらもらうが、メキシコ旅行の真の目的については、いつの夜かソニアの家から帰るときに、君に仄めかしたことがあった。そのときに私は、メキシコにはかつて、いくつもの隠れ家があったと言ったのだった。

重要なことは、彼らの進歩が、ある特定の考え方からもたらされたということであり、それらによって進歩がもたらされることを私は「今」、確信している。私が言っていることや書いていることは、間違っていない。とても大事なことなのだ。帰国したときに、フランスで安全に生きるための手段を見つけるべく、ここにやってきたのだ。そして、事態は何がなんでも変わらなければならない。したがって、メキシコに私は力を探しにやってきたのであり、その力は、そうした変化を促すためのものなのだ。ある国のなかで最もすばらしいものが、どうしてあたかも自動的に犠牲になりつづけなければならないのか、私には理解できない。

そういうわけで、私はまず生きることに苦労していて、とくに日頃口にする食事に困っている。しかし最終的にはメキシコを離れ、現地民の人々のもとへ行って、彼らが日々行っている儀礼に加えてもらいたいと考えている。何もでたらめに行こうとしているのではなく、キューバ滞在時に鉱脈を探り当てたのだ。ひとつ見つけたいものが、はっきりと存在する。もしそれを手にすることができれば、自動的に「本物のドラマ[5]」を上演することができるかもしれない。私はそれをつくらなければならないし、今回は成功するという確信を得ている。たくさんの人々に対して、そしてたくさんのものに対して、私は復讐をしなければならない。そのためには、是非ともそれを手にすることが必要なのだ。私の胸がいかに恨みに満ちているかを、そして散らばった汚物のことを忘れられないということを、君にはよくわかってほしい。

メキシコに来たのは、バランスを立て直して、不幸を打ちのめすためである。そう、それが重要なことなのだ。不幸は外にも内にもあるが、外の不幸もまた私自身から発せられている。

とはいえ、もう少ししたら帰ろうと思っている。あと3、4か月後の9月末か、10月の初めくらいには。そのときまでには、私はしっかりと武装できていることを願っている。以下は、君の申し出に関してだ。私はその日暮らしで生きているのであり、目の前にはわずかな金も残されていない。しかし、状況は日に日に良くなっていくだろう。私が［判読不能］行おうとしている任務には、メキシコ政府が対価を支払ってくれるだろうから。だから、君は自分が正しいと思うことをやればいい。今日は、何千フランかが、私にとっての財源となるだろう。自分がどういう運命にあるかは、与り知れない。いずれにしても、私がフランスへと帰国したということは、生活のための十分な手段を手中に収めたということを意味することになるだろう。したがって、私が前貸ししてもらっていた分は、帰ったときに返せることになるはずだ。そういうわけで、私が君に言ったことについては、君が判断が赴くままに決めてくれればいい。

友愛を込めて握手を。

アントナン・アルトー
フランス外交使節
ラルマ35番地
メキシコ・デ・エフェ
メキシコ―

メキシコ
1936年7月10日

アントナン・アルトー
フランス外交使節
メキシコ
ラルマ35番地　メキシコ

親愛なるバローへ

最後に手紙を送ったときから、状況が一変した。
インディアンの昔からの種族のもとで、〈任務〉を果

5）［訳註］アルトーはこの手紙の余白に、このように書きつけている。「おそらく、舞台のうえで演劇を行うことが重要なのではない」。

たすための手段を私に与えるよう、メキシコで最も突出している知識人と芸術家たちに署名をしてもらった嘆願書を、何名かの大臣や省庁の署名も添えて、この数日にフランス大統領宛に送っている。

重要なのは、古代の〈太陽〉の文化の痕跡を見つけだして、それを再び甦らせることである。

しかし、すべてが整うまで、命をつないでおかねばならない。そのため、ベルナール・パリッシー〔1510頃–1590、フランス・ルネサンス期に活躍した陶工職人〕のように、私は四肢を焼かれ、苦しみと絶望のうちに生きつづけるだろう。

そのためには、パリにいる友人たちの助けが必要となる。

そこで君に頼みたいのだ。努力をしたり、できることを手紙で送ってもらうのを待っている余裕はもはやない。友人たちから集めてもらってもいいし、君が直接送ってくれてもいい。こうしたことを頼むことを恥ずかしいなどとは思っていられない。というのも、私が置かれている状況は深刻なのである。しかし、このような期待が達成されれば、きっと衝撃が走ることになるだろう。パリでの信頼も固いものになるだろう。こちらでは公的な人々が私のことを信頼してくれているが、しかし今のところ彼らだけなのだ。私は、無我夢中で努力を傾けている。だから無我夢中で、一刻も早く努力をしてほしい。もう力の限界であり、住むところも、蓄えも限界に来ている。本当に厳しい。君のことを信じている。

アントナン・アルトー

（訳：堀切克洋）